

アダム・スミスの労働価値論の再構成

——労働、共感および穀物の栄養的価値——

高 哲 男

本稿の目的は、従来の研究で「投下労働説 spent labor theory」, 「支配労働 buyable or commandable labor theory」および「労働犠牲説 labor-disutility theory」という互いに矛盾する3つの構成要素から構成されていると論難されてきたアダム・スミスの労働価値説を、厳密な文献考証を通じて、内在的に再構成することである。言い換えると、普遍的な価値尺度である「労働」は、「短期」では貨幣によって、長期には穀物によってその価値がもっともよくあらわされるとスミスが主張した理由と根拠を、労働生産物が「維持しうる労働量」という概念に注目することによって捉え直そうとするものである。要するに、『国富論』第一篇第五章までで展開された「労働価値説」を、分業による生産性発展の物理学的理解、生産物を「社会の共同資産」ととらえる視覚、商品所有者の主観的判断と共感に基づく交換価値の決定を説明したものであるという点だけでなく、さらにスミスは、この全体を生物学的視点つまり「栄養価」の視点を根本に据えた有機的な理論として説明していたという理解である。結果的に、スミスの経済発展論は、分業の発展に基づく生産性の向上が生産物と人口の量的拡大のみならず、生産物の多様化(消費の多様化)とストア主義的視点から見た自由の拡大という進化論的内容であった、という事実が浮き彫りされるはずである。スミスの経済学がマルサスやリカードのような「暗鬱な経済学」にならなかった根本的な理由は、人間行動の本源的な推進力としてみれば、「利己心」と並んで「共感」が、そもそも本能として人間に組み込まれていると主張し続けた『道徳感情論』だけでなく、生物学的で進化論的な認識と方法論に立脚していたという事実にあることも、同時に分かってくるだろう。

I. 分業と交換性向：物理学的・機械論的認識と共感の役割

「労働生産力における最大の改善、つまり労働を管理したり利用したりする際の技能、技量や判断力の大部分は、分業によってもたらされた」[WN.I.i.1] という指摘からわかるように、スミス分業論の基本的特徴は、生産における物理的・力学的効率（投入産出における時間当たり効率性のことで、運動量やエネルギーを基準に計測される）の増大を実現する手段として概念されたところにある。そしてこの点に関する彼の卓越は、力学的・統計熱力学的厳密さを考慮することなく、18世紀イングランドで製造業をもつ小さな町であればどこにでもあった「わず

か一〇人を雇い、彼らの一部が二つか三つの異なった作業を遂行するような小工場」[WN.I.i.3]から、A.ヤングが見た「200人から300人の児童」を雇用している「ピン工場」¹⁾——ピン製造の先進国オランダではワークハウスの低賃金労働者が活用されたが、イングランドにおける革新は、児童労働を導入した点にある²⁾——に至る、誰にでも知られていた分業の事例をとりあげて、事の本質を明確に提示したことにある³⁾。

スミスの分業論は、たんなる自然の観察に従事し、機械を発明することによって「生産性の向上」に直接寄与する「哲学者」という直接「もの」の製造に従事しない人間を含むが、基本的に「生活の必需品や便宜品」の生産に従事する個人をつうじて社会的に実現される力学的「生産性向上」の原理の解明である。これは、「どの労働者も、自分自身で消費する量をはるかに超える生産物を持っており、他の労働者も残らずまったく同じ状況にあるから、誰もが自分が作ったものの大部分を他人が作ったものの大部分と、つまり同じことだが、他人が作った大部分の物の価格と交換できるわけである」(WN.I.i.10)というスミスの主張に明らかである。こうして「文明が進み、繁栄している国」では「たとえごく一部にすぎないとしても、このような気が利いた実用品の製造に勤労の一部を振り向けている人間の数が、考えられないほど多い」(WN.I.i.11)ことになる。要するに、『国富論』第1章の「分業論」は、個々の労働者を単位に見た機械的・物理的な生産性向上の説明であり、生産性向上にもとづく「余剰=自分で消費する以上の生産物」を交換する社会モデルである。

だが、第2章では、異なったイメージが提起される。人間の社会では、「生産物は、交渉し、交換し、取り引きしようとする一般的で生れつきもっている気質によって、いわば共同資産 common stock になる」(WN.I.ii.5)という主張が展開されるからである。

分業とは実に多くの利益を引き出してくれるものだが、もともとこれは人間の英知——それがもたらす一般的な富裕を予見したり意図したりするような英知——の産物ではない。それは、そのような広範な有用性など思いつきもしないような人間性のうちのある性向もたらす必然的な帰結であって、あるものを他のものと取り引きし、やり取りし、交換するというこうした性向が極めてゆっくりと、徐々に作り上げたものなのである。(WN.I.ii.1)

分業は英知の産物ではなく、人間がもつ「交換性向 propensity to truck, barter and exchange」⁴⁾の「必然的な帰結」だという主張が、分業の人類学的基礎として提唱されていることは間違いないのだが、『国富論』では、「このような性向が、ここではこれ以上詳論しえない根元的な人間性に属するか、あるいは大いにありそうなことだが、理性と言語能力が必然的にもたらしたものかということも、当面の研究課題ではない。それは人間であれば誰にでも共通しているが、他の動物種ではまったく見られない」(WN.I.ii.2)と主張されているにすぎず、研究史上も、ほぼ字義どおりに解釈されてきた。だが、『道徳感情論』第6版(1790)で以下の追加がなされたこ

とを、見逃すことはできない。

信じようとする欲求、さらに他の人々をその気にさせて誘導し、説得しようとする欲求は、すべての人間の自然の欲求のうち最も強い部類の一つだと思われる。恐らく、それは人間性を特徴付ける能力である会話能力を支える土台としての本能なのだ。他のどんな動物もこの能力を持っておらず、他の動物のなかに、仲間の判断や行動を指導したり仕向けたりしようという欲求を見出すことはできない (Smith [1790] 1976, TMS.VII.iv.25)

このようにスミスは間違いなく 1790 年までに、交換性向は「根本的な人間性」に属し、そのような本能が「理性と言語能力」を生み出す土台なのだ、と確信するようになっていた。経験的知識にとどまらない「本能」——『国富論』ではほとんど使われることがない——という明確な認識は、おそらく『国富論』執筆時における生物学研究の成果を含む論文「外部感覚について」の後半部で明確に意識され、展開され始めたものであって (高 2007, 119-120)、内容的には、『道徳感情論』第 6 版における認識に直結する内容であったと言ってよい。そもそも『国富論』では、次のように主張していた。

人間は、ほとんどいつでも仲間の助力が不可欠だが、好意にもとづく助力を期待するだけでは、良い結果は得られない。彼に有利になるように、彼らの利己心に訴えかけることができれば——彼のして欲しいことをすることが彼ら自身の利益になる、と彼らに知らせることができれば——、ずっとうまく説得できるだろう。これは、他の誰かと何か取り引きしようとする時、誰でも試みることなのだ。この提案の意味は、私が欲しいものをくださるなら、あなたの欲しいものが手に入りますよ、というものである。我々が必要としている申し分のない援助というものは、ほとんどすべてこのような方法で確保されるのである。(WN.I.ii.2)

同じ内容の主張が、100 年のちに C. ダーウィンによって「社会的本能」と名付けられ、「共感はその本能の本質的な一部である」⁵⁾ (Darwin [1871] 1874, 99) と指摘されたことも、また現代の進化生物学者ド・ヴァールによって「交友を求め、それを楽しむ動物」(de Wall 1996, 170; 訳 280) に固有の「互恵的利他主義 reciprocal altruism」(Ibid., 153-54; 訳 261) と呼ばれるようになったという事実も、もちろんスミスはまったく知るよしがない。だが、たとえまだ未成熟な概念にとどまるとはいえ、スミスのいう「交換性向」が、本能としての共感にもとづいており、ダーウィンのいう「社会的本能」やド・ヴァールのいう「互恵的利他主義」という人間性の理解と基本的に共通していることは間違いない⁶⁾。分業に従事する個人を、あくまでも共同社会を織りなす全体の構成要素として、つまり共感によって結びつけられた「一体感 fellow feeling」

を有する有機的結合体として捉えるスミスの目は⁷⁾、明らかに比較行動学的で生物学的な観察眼であり、こうして彼は、分業を担う個人の生産物の全体を集団全体の「共同資産」であると主張することになったように思われる。

すべて同一種に属すると認められる多くの動物集団の場合、慣習や教育を身につける前から人間が持っていると思われるものに較べ、生まれつき持っている才能の違いがずっと大きい。マスティフの力強さはグレイハウンドの俊敏さ、スパニエルの利口さ、あるいは牧羊犬の従順さのいずれによっても、何ら援助される場所がない。このようなさまざまな才能や素質の効果は、交換し取り引きしようとする力や生来の気質が欠如しているため、共同資産にまで至りえず、種全体が享受しうる気の利いた実用性や便宜性の改善にはまったく役立たない。……中略……これとは逆に、人間の間では、似ても似つかぬ才能が互いに役に立つ。それぞれの才能が作るさまざまな生産物は、交渉し、交換し、取り引きしようとする一般的な生来の気質によって、いわば共同資産になるのであって、他人の才能が生み出した生産物の一部なら、自分が必要とするあらゆるものを、誰でもそこから購入できるのである。(WN.I.ii.5)

とすれば、こう言えるであろう。「我々にとって不可欠な、互恵的で申し分のない援助の大部分をたがいに確保するための手段が、交渉・交換および購買である」(WN.I.ii.3)というスミスの主張は、一方では『道徳感情論』で解明した「共感」にもとづく互恵的利他心の役割を前提したものであるが、『国富論』で展開された分業論との関連で見ると、他方で「自分の労働の生産物のうち自己消費分を上回る剰余部分のすべてを、彼が必要とする他人の労働生産物の剰余部分と交換できる確実性」(WN.I.ii.3)に支えられたものでもある。この「確実性」は、個人による個別的な生産物が「社会の共同資産」になれば、間違いなく高められる。その意味で、『国富論』第1篇第2章で展開された「交換性向」は、ダーウィンのいう「社会的本能としての共感」やド・ヴァールという「互恵的利他主義」の本能と同じの生物学的・人類学的な人間性の理解であり、これに立脚してスミスは、第一章で説明した物理学的・力学的な「生産性向上」の原理としての分業論を補完しようとしている。

要するに、分業社会で個々人がその剰余生産物を自分が必要とする他人の生産物と交換する場合、①社会の共同資産の一部と自分の生産物とを交換すると考えようと、②他人の剰余生産物と自分の剰余生産物とを直接交換すると考えようと、いずれにしても、自分自身の剰余生産物の「交換する力」と他人の剰余生産物をもつ「交換する力」とが較べられ、それぞれの生産者が互いにその大きさが等しいと「主観的に」判断したポイントで交換比率、つまり価格の決定がなされるはずである。剰余生産物に対する「市場の広さ」＝消費需要と生産物の供給とが一致するように市場で決定される価格、つまり剰余生産物の交換比率(価格)は、当事者にとっ

ては客観的なものであるが、結果的に決まる交換比率（価格）の有利不利にかかわらず、交換比率（価格）も含めてそのような交換の正当性が社会的に是認されるためには、ひとまず交換当事者（生産者）間における共感の存在が不可欠である。社会的に、つまり他者とのあいだで決定するという意味でも「客観的な」交換比率（価格）の役割は、比喩的に言えば、『道徳感情論』における「公平な観察者」や「行為の審判者による決定」と同様なものとして理解されているのである。

そうである限り、スミスの「労働価値説」はこのような理解を基礎に、客観的に成立する交換比率（価格）に対して、個々の生産者はどのように「主観的」に対応するかという点をめぐって展開されるはずなのだが、しかしスミスは、それを遂行する前に、実際には貨幣の登場が分業社会の拡大・発展にとって不可欠の重要性をもつと、あらかじめ強調・指摘していた。

第4章「貨幣の起源と利用について」に固有の課題は、「貨幣が、あらゆる文明国で商業の普遍的な道具——あらゆる財の売買、つまり相互の交換を媒介する道具——になった」（WN.Liv.11）由来の解明であるが、それは、3つの次元で遂行されている。第一に、分業社会から商業社会への推転とともに生じる人間性の変化。第二に、交換手段としての価値物の登場と金属貨幣。第三に、産業や商業を発展させるための国家による貨幣純分の保証である。

スミスが『国富論』で指摘した「商業社会」とは、要するに、分業によって発展する生産力と交換性向という人間本能にもとづいて、「生活必需品と便宜品」からなる生産物を社会の「共同資産」として生産し、「貨幣」つまり国家による含有純分保証をうけた金貨や銀貨といった「鑄貨」の価値が、その金属純分の重量ではなく、貨幣呼称の「数値」を基準にして、人々が生産物の交換価値を計算するという新しい制度＝思考習慣にもとづいて行動する「分業社会」のことなのだ。だからこそスミスは、「あらゆる財を貨幣と交換したり、相互に交換したりする場合、人が自然に遵守する約束事 rule とはどのようなものか、これが次の検討課題になる。財の相対価値とか交換価値と呼ばれるものを決めるのは、この約束事なのだ」（WN.Liv.12）と言うことになったのである。財の交換価値を決める「ルール」とは、どのようなものなのであろうか。

Ⅱ. 労働と価値：交換価値の真実の尺度と商品の真実価値

第五章の標題は「商品の真実価格と名目価格、すなわち労働で表示される価格 Price in Labor と貨幣で表示される価格 Price in Money について」であり、我々はそこに、「商品の真実価格」とは「労働で表示される価格」のことで、「商品の名目価格」とは「貨幣で表示される価格」のことであるという示唆を読み取るだろう。これは、先立つ第4章の末尾の予告つまり「この交換価値の真実の尺度はなにか、あるいは、あらゆる商品の真実価格 real price とは何であるのか」（WN.Liv.15）という問題提起に照応したものと言ってよい。第5章冒頭で、スミスは次のように言う。

誰であろうと、その貧富は、人間生活の必需品、便宜品および娯楽品を享受しうる程度に応じて決まる。だが、いったん分業が徹底してなされると、そのようなもののうち、自分自身の労働で自給できるのはごく一部分になる。誰もが、必要とするものの大部分を他人の労働から引き出さねばならず、支配あるいは購買できる労働量に応じて、誰でも豊かであったり貧しかったりするはずだ。したがって、あらゆる商品の価値は、自ら使用したり消費したりせず、もっぱら他の商品との交換用に所有する人にとっては、彼がそれで購買または支配できる労働量に等しい。それゆえ労働が、あらゆる商品の交換価値の真実の尺度である。(WNI.I.v.1)

このパラグラフは、E. キャンンが要約したように、「労働が交換可能な価値の真実の尺度である」(Cannan 1922, 32) と理解できるのは確かだが、『道徳感情論』や『法学講義 A ノート』におけるスミスの主張と対比しながら改めて吟味すると、「労働があらゆる商品の交換価値の真実の尺度である」という主張が、以下の2つの特徴を含んだ彼独自の新しいものであったことが分かるだろう。

第一に、スミスは使用価値＝効用と交換価値とを明確に区別したにもかかわらず⁸⁾、P. ダグラスが指摘したように、「効用を価値規定要因から排除した」。だが、その理由は「さまざまな対象物がもたらす全体効用を比較したからであり、限界効用を比較しなかった」(Douglas 1928, 78) からだけではない。むしろ本当の理由は、「我々の是認と否認の最初で主要な源泉となるのはこのような効用や害悪の見込みではない」(TMS. IV.2.3) とか、「是認という感情は、その中に効用の知覚とはまったく異なる適合性の感覚をつねに含んでいる」(TMS IV.2.5) という『道徳感情論』における指摘から明らかのように、スミスは、判断や行為における「適合性」の社会的決定に際して、対象がもつ効用よりも、「共感」を通じる認識主体相互間の感情の一致を重要視していたことに求められなければならない。商品を交換する当事者が「共感」する対象が、それぞれの商品がもつ「効用」、つまり消費によって入手する満足であるはずはない。というのは「このような効用や有害性からもたらされる素晴らしさや醜さを知覚することによって、このような感情が高められたり、活気付けられたりすることは確かである。それでもなお、それは本来的にも本質的にも、このような知覚とは異なったものである」(TMS. IV.2.3) からだ。「あらゆる商品の価値は購買または支配できる労働量に等しい」という主張は、そのような商品所有者同士の共感の基礎は、「効用」ではなく「労働」であるという認識に基づいている。

第二に、『国富論』におけるスミスは、「高価と希少、豊富と安価とは同義語である」と述べて「希少性と価格」とを直結した『グラスゴー講義 A ノート』における単純な数量説的価値規定から、明らかに大きく飛躍している⁹⁾。先の引用文からわかるように『国富論』では、交換価値の決定は、労働者 A が所有する商品と労働者 B が所有する商品の一定量が交換されるにあ

たつて、たとえ主観的な推測にとどまるにせよ、A と B とがそれぞれ相手の行為 = 「労働」に対して抱く共感の存在が前提されており、両者による「適合性」の主観的判断の結果として交換比率 = 価格決定がなされる、と説明されるようになったからである。

あらゆるものの真実価格、つまりどんなものでも、それを入手しようとする人が実際に要する費用は、それを獲得する苦勞と手数 *toil and trouble* である。……貨幣や財は一定量の労働の価値を含んでおり、我々はそれを、その時等しい量の価値を含んでいると判断したものと交換する。労働が最初の代価、すなわち、あらゆるものに対して支払われたそもそもその購買貨幣であった。世界中の富がそもそも購買されたのは、金や銀によってではなく、労働によってである。すなわち富の価値は、所有している富を何か新しい生産物と交換しようと目論んでいる人にとっては、その富によって購買または支配できるようになる労働量と、正確に等しいのだ。(WNI.v.2)

読者に強く印象付けようという意図からであろうが、「労働によって購買される」とか「労働が最初の代価であった」などという比喩的表現が織り込まれているため掴みにくくなっているとはいえ、ここでスミスが提起した新しい論点は、①あらゆる財の真実価格は、それを「入手するための費用」つまり本源的には労働に還元できるということ、②財の交換に際して、我々は「その時等しい量の価値を含んでいると判断したものと交換する」こと、これである。

財を「入手するための費用」が「苦勞と手数」つまり「犠牲」であることは、物理的・機械的事実に属することだから、改めて縷説する必要はあるまい。むしろ注意すべき点は、第二の主張の含意を正確に理解することである。a 財の所有者（生産者）を A、b 財の所有者（生産者）を B と表せば、「貨幣や財は一定量の労働の価値を含んでおり、我々はそれを、その時等しい量の価値を含んでいると判断したものと交換する」という主張は、厳密に言えば、次のような意味になるであろう。

A と B とが、それぞれの所有物を交換する際、A は、a 財を「入手するために要する費用」を直接知っている半面で、b 財のそれについては間接的つまり推測によって想像するだけである。これは、B についても同様であつて、彼は a 財を「入手するために要する費用」を間接的にうかがい知ることができるにすぎない。つまり「その時等しい量の価値を含んでいると判断したものと交換する」にあつて、A は b 財について、B は a 財について、「入手するために要する費用」を間接的な知識に基づいて推測し、それぞれが所有している生産物を「入手するために要する費用」と比べて等しいかどうかを主観的に判断するわけである。だが、客観的に眺めれば、この時較べられているのは、それぞれが間接的に理解し、その大きさを推測している他財の「費用」に他ならないことは明らかである。A が b 財の費用を、B が a 財の費用をそれぞれ推測し、推測された「費用」が等しい大きさであるという判断が両者で一致したときに交換

が成立するわけであって、この点に注目すれば、それぞれの主観的判断・推測に基づいて交換が行われるということが明白になってくる。Aがa財を入手する費用を知覚するのは自らの直接の知覚によるが、彼がb財のそれを知覚するのは、Bがb財の費用について知覚している内容に対する「共感」を通じるほかにない。人間が他者の知覚を知る方法は、自分自身の知覚によって他者の知覚への「共感」による他にないからであって、スミスがそれを『道徳感情論』の中で明確に指摘していたことは、すでに確認済みのところである。

だが、パラグラフ [2] での主張が、上記の2点で留まらないことも確かである。ここまでの議論では、いわば暗黙のうちに前提されていた自らの消費を上回る「剰余生産物」の交換、つまり基本的には「消費目的の」生活必需品の交換が想定されている。しかし、「富の価値は、所有している富を何か新しい生産物と交換しようと目論んでいる人にとっては、その富によって購買または支配できるようになる労働量と、正確に等しい」という主張からわかることは、①分業社会では消費のための必需品の交換だけでなく、「交換のための交換」がなされることもあり、②しかもその場合には、「所有している富を何か新しい生産物と交換しようと目論んでいる人」にとって、交換される財の価値は、費用ではなく「購買または支配できるようになる労働量」で決まる、ということである。

この主張で注意が必要なことは、「費用」は過去の事実であるが、「購買または支配できるようになる労働量」は、将来の事実であるということだ。先の例でいえば、Aは、a財とb財の過去の費用を推定・判断するだけでなく、a財とb財が将来「購買または支配できるようになる労働量」を推定・判断しなければならない。言い換えると、AとBは、a財とb財の「費用」だけでなく、「購買または支配できるようになる労働量」をも勘案して交換を実行することにより、過去の費用と将来の購買または支配量とを、「現在」つまり交換時に、それぞれ主観的に一致させるということなのである。このように「費用」としての労働の量と「購買または支配できるようになる」労働の量とは、そもそも時間軸において異なったものであるから、その「一致」については、あくまでも「存在する財」に限定する必要性があることにスミスは改めて気付き、第3版（1784）になって以下の説明を追加したように思われる¹⁰。

ホップズ氏が言うように、富は力である。だが、莫大な財産を獲得したり相続したりする人物が、必ずしも文民または軍人として、政治的な力を獲得したり相続したりする、というわけではない。恐らく彼の財産は、両方を入手する手段を提供するだろうが、たんに財産を所有しているだけで、いずれかが入手できるとはかぎらない。その所有が即座に直接もたらす力は、購買力——その時市場に存在する労働の全体、あるいは労働の生産物全体に対する一定の支配力——なのだ。彼の財産は、この力の大きさ——すなわち、それが購買または支配を可能にする他人の労働、あるいは同じことだが、他人労働の生産物の量——に正確に比例して、大きくもなり小さくもなる。あらゆるものの交換価値は、その所

有者にもたらされるこの力の大きさと、つねに厳密に等しいはずである。(WNI.v.3)

おそらくスミスは、第2版までの「労働を支配する力」という表現だけでは、政治的な支配力だけでなく、ストックとして存在する過去の労働の成果——莫大な財産——がもっている支配力まで含むることになり、分業社会における生産者間の「費用」の主観的な推定にもとづく財の交換が当面の主題であることが見失われかねないことを、恐れたに違いない。分業社会における「購買力」とは、「その時市場に存在する労働の全体、あるいは労働の生産物全体に対する一定の支配力」のことだと厳密に定義することにより、あらゆるものがもつ「交換する力」＝「購買力」の対象を、交換に付された——市場に持ち込まれた——生産物（所有財産）に限定し、社会全体の「共同資産」であるのは、基本的に当該年度中に生産された消費財であって、資本や土地などの蓄積された財産を含まない、という説明を追加したことになる。

とはいえ、「彼の財産は、この力の大きさ——すなわち、それが購買または支配を可能にする他人の労働、あるいは同じことだが、他人労働の生産物の量——に正確に比例して、大きくもなり小さくもなる」という主張からわかるように、いったん交換の場（市場）に持ち込まれれば、いかなる財産であれその交換価値は、交換対象物の量に「正確に比例して、大きくもなり小さくもなる」のであって、需給が均衡する点で交換比率（価格）が、つまりそれぞれの財の購買力が需給の変動・一致をつうじて「客観的」に決定されることに変わりはない。「購買または支配する労働量」つまり購買力の場合には、「費用」の場合と違って、「苦労と手数」に対する互いの共感——一体感をもたらすものとしての——はほとんど介在しないのだ。

とすれば、こう言えるだろう。「交換価値の真実の尺度は労働である」という命題における「労働」には、二つの側面がある。第一は、生活必需品を入手するための「費用」としてみた労働、つまり「苦労と手数」のことであるが、これは生活必需品を生産するために要する互いの「苦労と手数」に対する共感に基礎づけられている。第二は、所有する財が「購買または支配する労働量」あるいは「他人の労働生産物の量」という場合の「労働」であって、これはたんに物々交換を前提したような必需品の交換に限定されることなく、「所有している富を何か新しい生産物と交換しようと目論んでいる人」すべてが行う交換、つまり「購買」において妥当する。これは、財のもつ「交換する力」＝「購買力」に注目した場合に浮上する特徴である。

もちろんスミスは、この労働尺度論が抽象的であることを十分に自覚していた。理論的に導出された「物々交換」における尺度財よりも、数に換算可能な貨幣を用いたほうが交換はずっと容易になるという利便性の見地だけでなく、さらに「商品と貨幣」が交換される頻度が圧倒的に多いという経験的観察を根拠に、実際の尺度は「貨幣」に落ち着くと主張したからである。「肉屋が提供する肉は、三または四封度のパン、または三または四クォートの弱いビールと価値が等しいと言うよりも、肉一封度につき三ペンスか四ペンスの価値があると言う方が、はるかに現実的で理解し易いのである。このような次第で、あらゆる商品の交換価値は、それと交換

に入手しうる労働の量や他の商品の量によってではなく、貨幣の量で評価されるという事態が、ますます頻繁になる」(WN.I.v.6)。

だが、このような「制度主義者スミス」の主張は、次には、「理論家スミス」によって「それ自身の価値が絶えず変わる商品は、決して他の商品の正確な価値尺度になり得ない」と批判される。鑄貨に含まれる「金や銀も、それ自体価値が変わるといって他のあらゆる商品と同様であり、安かったり高価だったり、買いやすかったり買いにくかったりする」。アメリカにおける豊かな鉱山の発見は、一六世紀にヨーロッパにおける金銀の価値を以前の約三分の一に低下させたし、このような「急激な変化は、恐らく最大ではあろうが、歴史上知られている唯一のものでは決してない」(WN.I.v.7)。こうして理論家スミスは、「不変の価値尺度は何か」という問題の考察に向かわざるを得なくなる。

等しい量の労働は、何時いかなる所においても、労働者にとって等しい価値を持つ→と
言うことができよう←(第2版で追加)。→健康、体力、気力の点で普通の状態にあり、技能
や器用さの点でも普通の水準にある場合←(第2版で追加)、労働者というものは、自分自
身の安息、自由および幸福の全体からつねに等しい部分を犠牲にするはずである。彼が支
払う代償 price は、つねに等しいはずであり、労働と引き換えに受け取る財の量の多少に
左右されるわけではない。労働が購入しうる他財の量は、確かに多かったり少なかったり
するが、変化するのは財の価値であって、それを購入する労働の価値ではない。時間と場
所の如何にかかわらず、入手が困難なもの、つまり獲得するのに多大な労働を要するもの
は高価であり、ごくわずかな労働で、つまり容易に入手できるものは安価である。したがっ
て、それ自身の価値が決して変化しない労働だけが、時間と場所の如何にかかわらず、あ
らゆる商品の価値を評価・比較するための究極的かつ真実の基準なのだ。これが商品の真
実価格 real price であり、貨幣は商品の名目価格 nominal price にすぎない。(WN.I.v.7)

「労働犠牲説」と特徴づけられてきたこのパラグラフにおけるスミスの主張を正しく理解することは困難なことだが、それは、「労働者というものは、自分自身の安息、自由および幸福の全体からつねに等しい部分を犠牲にするはずである」のは何故かという理由が、明確に説明されていないことにある。

この疑問を解くためのカギは、「等しい量の労働は、何時いかなる所においても、労働者にとつて等しい価値を持つ」とスミスが言う場合の「価値」の意味を、正確に——このパラグラフにおける主張の全体と整合的に——理解することにある。言うところの「価値」は、具体的な財＝実物でも具体的な様々な使用価値でもなく、労働は、労働者が「安息、自由および幸福」を「犠牲」にするものであるがゆえに「貴重なもの」であり、「大切なもの」で「報いるに値するもの」だという意味で「価値がある worthy」、と理解すべきことが分かってくるからである。

『道徳感情論』から明らかなことだが、そもそもスミスは人生の理想を「心の平安 tranquility」つまり「田園的な平安と世間と没交渉な生活——親愛、自由および安らぎ、つまり労働、気配りおよびあらゆる付随的な荒れ狂う激情とは無縁の生活」(TMS.I.ii.2.2) に求め、「虚栄心と優越感にもとづく軽薄な喜びを別とすれば、個人的自由が存在しておりさえすれば、我々は、最も高貴な社会的位置が提供しうるすべてのことを、ほとんどすべての取るに足りない社会的地位において見つけることができよう。そして、虚栄心と優越感にもとづく喜びは、完全な心の平安——本当に満足できるあらゆる喜びの原動力であり基礎である——と、めったに一致することがない」(TMS.III.3.31) と主張していた。「人間生活における真の幸福を形作るもの」つまり、「身体の安楽と心の平和という点でみると、異なった身分の生活もすべてほぼ等しい水準にあり、主要道路の傍で日光浴をする乞食でも、国王がそれを目指して戦う安全を入手していることになる」(TMS.IV.1.10) からである。このような見地に立てば、この理想としての「心の平安」がもつ「価値」は、人間であれば、誰にとってもつねに「同じ」ことになる。しかもどの労働者にとっても、いつでも「同じ」大きさであるはずだ。「労働者は、人間的には基本的に同一である」という前提が満たされれば、労働者の「平安」=「安息、自由および幸福の全体」は「つねに等しい」。また、すべての労働者の「等しい量の労働」は「等しい量の犠牲」であるから、「平安」に対する「犠牲」の割合もまた、すべての労働者の間で等しくなる。「自分自身の安息、自由および幸福の全体からつねに等しい部分を犠牲にするはずである」のは、『道徳感情論』で展開したスミスの基本的幸福観からすれば、当然のことなのである。

これが『道徳感情論』で指摘された「欺瞞論」——物質的富裕に対するストア主義的懐疑——と深いところで結び付いた主張であることを詳説する必要はないだろう。だが、これが以下の「真実価格」と「名目価格」の区別と合わせて理解されると、さらに重要な別の意味が分かってくるだろう。分業に従事する人間であっても、「労働者」と「労働者を雇用する人物」=「雇い主」とでは、「労働の価値」が異なって見える、とスミスが言うからである。

Ⅲ. 賃金の実質価格と名目価格

従来の研究で見逃されてきた点は、「等しい労働量」がつねに「等しい価値をもつ」のはたんに労働者間においてのことであり、労働者を雇用する「雇い主」の目から見ると、「等量の労働」もその価値が増減するように見える、とスミスが主張したことである。

だが等しい労働量は、労働者にとってつねに等しい価値をもつが、労働者を雇用する人物の目には、等量の労働であっても、時々その価値が増減するように見える。雇い主が等量の労働を購入する際に引き渡す財の量が時々増減するため、彼の目には、労働の価格も、他のすべての商品と同様に变化するように見えるのだ。引き渡す財が増加する場合には労

働の価格が高く、減少する場合には安い、と彼は認識する。だが実際には、前者において安価であり後者において高価なのは、財のほうなのだ (WN.I.v.8)

労働者の雇い主が労働と引き換えに渡すのは、実質的には、貨幣ではなく「財 goods」つまり「生活必需品と便宜品」である。つまり、雇用する同一量の労働と引き換えにより多くの財を引き渡す必要があれば、雇い主は「労働は高価」であり、逆の場合は、「安価」であると「認識する」とはいえ、そもそも労働の価値は不変であるから、変化するのは財の価値のほうであって、雇い主にとって「労働の高価」が意味することは「財の安価」以外にない、という主張である。もとよりそのような理解は、雇い主に限られるわけではない。雇い主が存在すれば、つねに労働者も存在する。労働者は、労働と引き換えに「報酬」を貨幣で受け取るから、このような「労働の真実価格」の理解は、決して「雇い主」だけのものは留まらず、労働者もまた、このような「一般的に広まっている意味」で理解しはじめるからである。

したがって、この一般的に広まっている意味で言うなら、商品と同じように労働も真実価格と名目価格を持つ、ということができよう。その真実価格とは、労働と引き換えに渡される生活必需品と便宜品の量であり、その名目価格が貨幣の量である、と言ってよい。労働者が豊かであるか貧しいか、つまりその報酬が良いか悪いかは、労働の真実価格に応じて決まるのであって、名目価格に応じて決まるわけではない。(WN.I.v.9)

したがって、こう言えるであろう。スミスのいう「労働の真実価格 real price」には二つの異なる意味がある。第一に、それは前節で考察した純粹に理論的つまり「哲学的」なもので、費用としての「苦労と手数」であり、「心の平安」の放棄としての「犠牲」である。第二に、「一般的に広まっている意味」、つまり労働の「雇い主」と雇用労働者それぞれの主観的理解において、労働と引き換えられる「生活必需品と便宜品の量」のことである。「名目価格」はそれを「貨幣の量」で表現したものにすぎない。労働の「真実価格」と「名目価格」の区別は、商業社会が「雇い主」と労働者とから成り立つようになった場合に「一般的に広まる」理解なのだ、というのがスミスの指摘なのである¹¹⁾。「真実価格」と「名目価格」の区別は、けっして「労働」を価値尺度とする理論的な「貨幣」価値の変動からではなく、「雇い主」と労働者において生じる意識＝思考習慣の社会的・歴史的变化から導き出されていることに、注意されたい。スミスはここでは明らかに制度主義者なのだが、制度主義的に考えるということは、「時と所」を特定して考えるということに他ならない。

時間と場所が同一である場合には、あらゆる商品の真実価格と名目価格は、それぞれ正確に釣合っている。たとえば、任意の商品をロンドンの市場で売却して得られる貨幣量の多

少に応じて、その貨幣でもって同じ時間と場所で購入または支配できる労働も、多かったり少なかったりする。それゆえ、時間と場所が同一である場合には、貨幣が、あらゆる商品の真実の交換価値をはかる正確な尺度である。だがこうなるのは、時間と場所が同じ場合にかざられる。(WN.I.v.19)

では、「時」が異なる場合、つまり時代が異なるような長期においては、どうであろうか。

時間的にかけ離れている場合、等量の労働は、等量の金銀、あるいは恐らく他のあらゆる商品よりも、労働者の生活の糧である穀物の等量によって、より正確に購買されるだろう。それ故、時間的にかけ離れている場合、等量の穀物は、他の何にもまして同一の真実価値 real value に近いものを保ち続ける——つまりその所有者に、他人の労働の同一量にほぼ等しいものを、購買または支配できるようにする——であろう。もちろん、これは等量の穀物でさえ正確になし得ない事柄であって、ほとんどすべての他の商品の等量によるよりも、穀物の方がずっと正確になるというだけのことである。(WN.I.v.15)

だが、なぜ「時間的にかけ離れている場合」に、「等量の穀物」は「等量の労働」を「より正確に購買する」、つまり「支配する」のであろうか。S. ホランダー (Hollander 1973) はじめ¹²⁾、従来スミスの労働価値説を検討してきた研究者がほとんど見過ごしてきたことだが、「等量の穀物は、等量の労働を維持する」という生物学的・栄養学的な「価値」の認識を、スミスがもっていたからに他ならない。

IV. 穀物の栄養価：労働価値論の生物学的基礎

J. アンダーソンの批判を受けて「価値」を「価格」に訂正した箇所としてよく知られているが、「事物の自然は、たんにその貨幣価格を変えることによって決して変えられない真実の価値を穀物に刻み込んでいる」(WN.IV.v.a.23) とスミスは信じていた¹³⁾。

だが、事物の自然が穀物に刻み込んだ価値とは、一体どのような価値なのであろうか。11 章はスミスの「構成価格論」つまり「地代は、価格の結果であって、その原因ではない」という主張を証明する箇所であるが、論点を「穀物が維持しうる労働量」に絞って考察すれば、注目すべきは以下の主張である。

人間は、あらゆる他の動物と同様に、生存手段に応じて自然に増殖するものであるから、食料はつねにほとんど需要を見いだす。それはつねに、より多いかまたは少ない労働量を購買または支配でき、しかも、食料を手に入れるために進んで何かをしようとする人はい

つでもいる。じっさい食料が購買しうる労働量は、もし食料が最も経済的な仕方管理される managed なら、ときどき労働に与えられる高賃金のために、それが維持しえたであろう労働量につねに等しいわけではない。しかし食料は、そのような種類の労働がふつう近隣地域で維持されている程度 rate に応じて、つねにそれが維持しうるだけの労働量を購買しうる。(WN.I.xi.b.1)

このパラグラフの主張にはあいまいな点が多く含まれているが、「土地は、ほぼどのような位置にあっても、食料を市場にもたらすために必要な労働のすべてを、かつて労働が維持されてきた仕方のうち最も気前のいい仕方維持するために十分な量よりも、はるかに多くの食料を生産する (WN.I.xi.b.2)」という主張と合わせて解釈すれば、次のような意味になる。

人間の数つまり人口は、他の動物同様に、入手しうる食料の量に規制されている。しかし土地は、耕作しさえすれば、投入労働量を「維持するために十分な量」以上の生産物=食料を生み出す力をもっている。食料と交換できれば、労働を提供する労働者はいつでもいるし、時々、提供した労働以上の労働を「維持する」だけの食糧が生産され、労働者に分配されるだろう。もちろん、「食料の量」がどれだけの「労働量」を購入できるか否かの決定に際しては、「近隣地域で労働が維持されている程度」つまり実質賃金の大きさが少なからず影響を及ぼす。だが、労働が食料の生産のために充用されるかぎり、その労働は、より多くの食料を——より多くの労働を維持するために必要な量を超える食料——を必ず生産する、とスミスは主張している。要するに、単なる労働量ではなく、「一定の食糧が維持しうる労働量」を基準にして、スミスは議論しているのだ。

そうして、ここで重要なことは、1単位あたりの食料の量が「維持しうる労働の量」を基準にみた場合、一単位の食料を手に入れるために必要な労働量よりも、産出された一単位の食料が「維持しうる労働量」のほうが大きい、という関係をつねに成り立たせるような「食料」は、何よりもまず「穀物」つまり「小麦」であるという点——土地生産物のうち、最も栄養価 nutritive value の高い生産物は穀物である——にある。

並みの肥沃度をもつ穀物畑は、同じ広さの最良の放牧地よりも、はるかに多くの人間用の食料を産出する。その耕作には、はるかに多くの労働が欠かせないが、種子を置き換え、耕作に要する労働をすべて維持したあとに残る剰余は、さらにまたずっと大きなものである。したがって、もし1ポンドの食肉が1ポンドのパンよりもずっと価値があるなどと想定されることが決してないとする、このより大きな剰余はどこでもより大きな価値をもつであろうし、それゆえ、農業者の利潤と地主の地代の両方に充てられうるより大きなファンドとなるであろう。始まったばかりの農業 the rude beginnings of agriculture では、あらゆる所でそのようになされていたように思われる。(WN.I.xi.b.6)

等しい面積の穀物畑と放牧地とで生産される「食料の量」は、穀物畑のほうが「多い」という指摘は、なにを意味するのだろうか。「維持しうる労働量」を基準にみると、1 単位あたりのパン（小麦）と食肉とをそれぞれの「栄養価」を基準に較べた場合、産出された穀物 1 単位が「維持しうる労働量」のほうがはるかに大きいという栄養率のことであろう。あまり正確な計算とは言えないが、要するにスミスは、栽培上の代替性をもつ同一面積の穀物畑と放牧地の利用を前提したうえで生産物の栄養価が高い、という意味で「ずっと価値がある」と判断・主張していることになるが、等量の労働がもたらす生産物であっても、それぞれの生産物が「維持しうる労働量」は小麦のほうが食肉よりもずっと大きい、という主張なのである。

もちろん、だからといって耕作可能な土地のすべてが穀物の生産だけに充たされ尽くす、ということにはならない。土地の広さが一定であるとすれば、穀物耕作地が増加した分だけ放牧地は減少し、穀物の産出量が増加した分だけ、食肉の産出量は減少する。結果的に食肉の相対価格が上昇するが、1 ポンドあたりの「維持しうる労働量」が相対的に小さな食肉は、「量が劣る点は価格の高さで補われる」(WN.I.xi.b.9.165)、とスミスが説明する価格メカニズムが機能するからである。つまり、1 ポンドの食肉を入手するためには、従来よりも多くの量の穀物を引き渡さなければならないということ、したがって結果的に、1 ポンドの食肉の価値は、それ自体が「維持しうる労働の量」だけではなく、交換をつうじて得られる穀物の「維持しうる労働量」の増加によって、「補われる」という関係が成立する。食肉に対する需要が増えて、食肉の「穀物価格」が上昇するというからである¹⁴⁾。もちろんこうなっても、穀物の同一量が「維持しうる労働の量」はまったく変化しない。したがって、穀物の価値つまりその「栄養価」が不変であるかぎり、生物学的にみれば、労働の価値もまた不変だということになる。スミスが「事物の自然が穀物に刻み込んだ真実の価値」とは、生物学的・栄養学的観点からの理解に支えられた普遍的な「価値」だからである。こう見てくると、『国富論』第一編第 11 章に組み込まれた「銀価値の変動に関する余論」に含まれる以下のスミスの主張が一層良く理解でき、しかも、それが第 5 章で展開された「労働、貨幣、穀物」という 3 つの価値尺度をめぐる議論と正確に対応していたことが了解できるだろう。

社会がどのような状態にあっても、改良の段階がどうであっても、穀物は人間の勤労の生産物である。だが、あらゆる種類の勤労の平均的な生産量はその平均的な消費量に、すなわちその平均的な供給量はその平均的な消費量に、つねにほとんど正確に適合している。くわえて、改良の段階がどのようなものであろうと、同一の土壌と気候のもとで等しい量の穀物を生産することは、平均的にみれば、ほぼ等しい労働の量を、すなわち同じことになるが、ほぼ等しい量の代償 price を要するであろう。すなわち、耕作が進展しつつある状態のもとで持続的に上昇する労働の生産力は、農業における主要な道具である家畜の価格が持続的に上昇することにより、多かれ少なかれ打ち消されてしまうからである。した

がって、以上すべての理由から、等しい量の穀物は、どのような社会状態のもとであれ、どのような改良の段階においてであれ、他のあらゆる種類の土地の粗生産物の等しい量よりも、よりいっそう近似的に等しい量の労働を代表しているであろうと、つまりそれといっそう近似的に等価値であろうと安んじて言うことができよう。したがって穀物は、すでに述べておいたように、富と改良の段階がどれほど異なったものであろうとつねに、他のあらゆる商品または一組の諸商品よりも、より正確な価値の尺度である。それゆえ、このような異なった段階のすべてにおいて、われわれが銀の真実価値をよりよく判断できるのは、それを他の何らかの商品あるいは一組の諸商品と較べることよりもむしろ、それを穀物と較べることによってなのである。(WN.I.xi.e.28.)

さらに、投入労働量や作付面積当たりの収穫量を基準に比較した場合、米のほうが小麦よりも栄養的に見てより収穫量が多いという事実だけでなく (WN.I.xi.b.37)、ジャガイモのほうが小麦よりも栄養に富むという事実を、スミスは熟知していたばかりか、きわめて重視していた。だからスミスは、ジャガイモの耕作が将来一般的に広まっていけば、食糧の真実価格が低下し、食料の生産に投入される資本と労働を維持した後に残る剰余が増加することになり、人口が増加するか、生活水準が向上するかし、地代の価値が増大するはずだという展望を抱いていた (WN.I.xi.b.39)。「ジャガイモやトウモロコシ——インディアン・コーンと呼ばれるもの——は、ヨーロッパの農業——恐らくヨーロッパそれ自体——がその商業と航海の大拡張から受け取った二つのもっとも重要な改良である」と評価しただけでなく、「イングランドのほとんどのところで、貧民の境遇はジャガイモの価格の下落によって助けられていたから、家禽、魚、野禽あるいはシカ肉の値上がりによってそれほど押し下げられたはずがないのは確かだ」というスミスの主張は、そのような推論に基づいたものであった (WN.I.xi.n.10)。しかし現実には、スミスが指摘したように、ジャガイモの「腐敗しやすい」性質が、数年間保存がきく穀物にくらべて市場で売りさばくために著しく不利だったため、ジャガイモが主食として小麦に代替することはなかったのだが (WN.I.xi.b.42)¹⁵⁾。

V. むすび

以上みてきたように、スミスが第5章で解明しようとした「交換価値の真実の尺度」は、たんに理論的であるだけでなく、歴史的・制度論考察に加え、生物学的・栄養学的認識に支えられた重層的で多面的な分析であった点に特徴がある。従来の研究は、スミスの労働価値論に特有なこのような内的統一性を見逃してきた点で、大きな限界があったと言わなければならない。『国富論』第1篇第4章までが「生産力改善の原因」の解明であり、第6章以降で「労働生産物が様々な階級の人々に自然に分配される秩序」が解明されたことは確かだが、労働価値説が定

式化された第 5 章「商品の真実価格と名目価格」の構成上の位置や意義、さらに最終第 11 章「地代について」のなかに組み込まれざるを得なかった「銀価値の変動に関する余論」で、4 世紀という長期にわたって「不変の価値尺度である労働」と穀物や金や銀との間の価値関係を確認する必要があった、という事実のもつ意義とを、まったく理解できなかったからである。

アダム・スミスの労働価値論の基本的特徴は、以下 5 つの特徴にまとめることができよう。第一に、分業によって生産力の発展を説明することは、基本的には、物々交換モデルを前提した物理学的・機械論的な——エネルギーと運動量を基準に生産の効率性を追求する——社会認識の方法に基づいている。個々に独立した個人が織りなす分業社会は、より多くの生活必需品の享受をめざす利己心に支えられるだけでなく、交換性向という人間が生まれつき持つ互恵的利他主義の本能に支えられて、個々人の剰余生産物の全体を社会の「共同資産」であると理解するような社会である。第二に、分業の発展は、貴金属の純分を国家によって保障された鑄貨の登場によって著しく加速化するだけでなく、交換価値を鑄貨の数量で計算するような思考習慣＝制度を一般化させる。第三に、労働には二つの意味があって、一つは生活必需品を入手するための費用つまり「苦労と手数」＝「犠牲」であるが、交換の対象になる財貨の生産に要する費用については直接知ることは不可能であり、この大きさは、互いの「苦労と手数」に対する共感に基礎づけられ、推定されるほかにないし、交換比率についても事後的な社会的承認つまり社会の共感を通じて是認される必要がある。もう一つは必需品の物々交換モデルではなく、「所有する富を何か新しい生産物と交換しようともくろんでいる人」の場合には、「購買または支配しうる労働の量」が交換価値の尺度になるが、これは共感には基礎付けられていない。第四に、このような共感が成立する究極の根拠は、労働はすべての人間が等しく持ち、人間性の本質である「心身の平安 tranquility」つまり「自由」を犠牲にしたものだからである。それゆえ、自由の犠牲としての労働の量がそれ自体の大きさが変わらない不変の価値尺度であるが、これはあくまでも分かりにくい抽象的・理論的な概念に過ぎず、実際には、「労働を雇用する人」とっては、労働の「真実価格」が生活必需品の量であり、貨幣量で表せば「名目価格」としてと観念される。第五に、貴金属貨幣が交換価値の尺度であるのは「時と場所が同じ」短期にかぎられ、長期的には穀物とその近似的な尺度になる。というのは、貴金属の価値は鉱山の肥沃度次第で変化するのに対し、穀物には「変わることはない真実の価値」、つまり最も有利に労働を扶養・維持する栄養が「自然によって鑄込まれている」からである。社会的な富裕の進展つまり経済発展は、人間が穀物の生産を開始し、その生産量を増加させていくことによって加速するのであって、その意味でいうと、分業の発展の程度は基本的に穀物生産の程度に依存するというわけである。

要するに、身体を維持するために不可欠な食料のうち、栄養学的に見て最も生産効率のよい作物である「穀物」——小麦と米——の一定量が、人間が生きていくために「絶対的に」必要だという生物学的な特徴に注目することによって、スミスは、「穀物」が世紀をまたぐ長期にお

いては、「近似的に」価値の尺度として有効であると主張しただけでなく、さらに「銀価値の変動に関する余論」では、4世紀に及ぶ銀（貴金属）価値と穀物、さらに他の商品との価値・価格関係を吟味し、経済発展の内実を解明していくことになった。まさにその意味において、『国富論』におけるスミスの経済分析の基本概念は、『道徳感情論』で展開された共感概念に依拠していただけでなく、人間と自然の客観的・生物学的な認識に基づいて構築されたものであったのである。

注

- 1) A.ヤングが、ウォーリントンの労働者に関する記述の中で、「ここでもまた他のところ同様に、小さなピン工場があるが、200人から300人の児童を雇い、週当たり一シリングから2シリングを払っている。輸出用のもう一つの工場は、400ないし500人の（男子）を週に9シリングを払って雇用している」（Young（[1771] 1967. vol.3, 165）と述べていることから推測できる。小規模なピン工場なら、イングランドの地方都市では随所に存在していたと見てよいだろう。
- 2) イングランドにおけるピン製造業の発展についての詳細は Thirsk（1978, 78-83）を参照のこと。「顕示的消費の時代、つまりあらゆる階層の人々が服装の流行の変化に関心をもつようになったこの時代（17世紀第一四半期）に、ピンは紛れもなく生活必需品の一つであった」（Ibid., 78：訳102）。なおサークスによれば、ロンドン近郊で始まったピン製造業の発展を加速したのはオランダからの移住者であつたらしく、エリザベス朝の終わりまで、ピンの輸入禁止措置が定期的に更新され続けた。1620年代に始まったグロスタシャのピン製造業はその後二世紀続き、「1735年には、ピン製造はグロスタシャの主要な製造業であり、9種の職種と19種の工程を包括していた」（79: 訳108）という。これは、「ピンの製造という有意義な事業は約18の異なった作業工程に細分化される」（WN.I.i.3）というスミスの解説にほとんど一致している。
- 3) このように生活必需品である「ピン」の生産がイギリス全土に広まっていた事実を考慮すれば、「スミスは工場制度の詳細な観察者としてしばしば指摘されてきたが、フランスの『百科全書』の中にピン工場における分業に関する記事があるだけで、スミスが実際にピン工場を訪問したかどうかは確かではない」（Fitzgibbons 1995, 92）などというフィッツギボンズの指摘には、疑問符が付かざるをえない。
- 4) ただし、「交換しようとする性癖 trucking disposition」という表現も例外的に用いられている（WN I.ii.3）。参考までに『法学講義（LJA, March. 28. 1763）』では、「英知の産物ではない」が「人間による政策の結果ではない」と指摘した後で（Ibid., 347）、すべてが the disposition to truck, barter, and exchange と表現されている。1762年に書かれたとされる『『国富論』初期草稿』における表現は、『国富論』とまったく同じだから、この場合、スミスが propensity と disposition とをおおよそ同じ意味で用いていたと言ってよい。
- 5) パラグラフ全体を引用しておこう。「だが、銘記しておかねばならぬことは、我々がどれだけ多く世論のせいにとできるとしても、仲間による是認や否認に対する我々の配慮は、後に考察するように、社会的本能の本質的部分であり、実際その角石でもある共感に依存している、ということである」（Darwin 1874, 99）。この部分は、初版では、「だが、社会的本能は共同社会の利益のために活動しようとする今までどおりに刺激するであろうが、この衝動——すぐに我々が考察するように、本能的共感に依拠した力——は、世論によって強化され、導かれ、さらに変更させられさえる

- のである」(Darwin 1871, 訳 71)であった。実質的に同じ内容であるとはいえ、第二版では、「共感」は社会的本能の「本質的部分」であり、「その隅石である」と、両者が明確に関連付けられている。
- 6) 紙面の制約のため、詳述は避けるが、ダーウィンもド・ヴァールも、スミスの共感概念を高く評価している。C. ダーウィンは『道徳感情論』の第一章を「素晴らしい章」と激賞しているし(Darwin [1871] 1874, 106)、ド・ヴァールは「経済学の父アダム・スミスは、自己利益の追求は“仲間との一体感 fellow feeling”によって調節される必要があると間違いなく理解していた」(de Waal 2009, 1)と評価したうえで、「スミスは、社会を巨大な機械——その車輪は美德で滑らかにされる一方で、悪徳はそれをギシギシと摩耗させる——と理解した。その機械は、あらゆる市民が強固なコミュニティ意識をもっていないと、スムーズな運行などまったく期待できない。スミスは、随所で正直、道徳、共感さらに正義について言及しており、それが市場の見えない手に対する不可避の付き物であると理解した」(Ibid., 222)と述べている。
- 7) 日本のスミス研究ではあまり注目されてこなかった、スミス自身の「共感」に関する辞書の説明を紹介しておきたい。「同情と思いやりは、他者の悲哀に対して我々が抱く一体感を示すのに適した言葉である。共感 sympathy は、その意味はおそらくもともと同一であったが、今では、およそ何らかの激情 passion との一体感を表示するために用いることができる、と言っても大きな間違いではないであろう [TMS.Ii.1.5]」。
- 8) 第 4 章の最後の部分でスミスは、次のように主張していた。「価値という言葉には二つの異なった意味があること、すなわち、ある特定のものの効用をさす時と、ものを所有しているが故に生じる他財を購買する力をさす時がある、ということに注意しなければならない。前者を‘使用価値’、後者を‘交換価値’と呼ぶことができる」(WN.Iv.13)。
- 9) 念のため、A ノートから該当箇所を引用しておこう。「市場価格をその自然価格以上に引き上げる傾向をもつ政策は何であれ、社会の富裕と国の自然的な富を減少させる。高価と少なさ、豊富と安価とは同義語だといえるからである。たくさんある物はなんであれ劣った階層の人々に売られるであろうし、他方、わずかしかなければとび抜けて豊かな人々にのみ売られ、こうしてその量も当然わずかであろうから。したがって、いかなる財であれ、それが生活の便宜品や必需品であり人間の幸福に役立つものであるかぎり、それが高価であるということは、必需品を少数に限定し、劣った階層の人々の幸福を減少させる分だけ有害である。したがって、便宜品や必需品の価格を上昇またはつりあげるものは何であれ、その国の富裕と幸福と安楽さを減少させることになる。」(LJ(A), [84] 362)
- 10) 厳密に言えば、第 3 版 (1784) からというより、第 3 版の刊行に一月先立って印刷配布された「以前の購入者の便宜を図る」ための『訂正と増補』において加えられたパラグラフである。参考までに、第 2 版は 1778 年の刊行である。
- 11) わが国では、『国富論』の分析が基本的に独立生産者モデルに基づくものであるのか、それとも資本主義モデルに基づくそれであるかをめぐって、長い間論争あるいは見解の相違が表明されてきた。前者を主張したのが小林昇であり、後者の代表が羽鳥卓也である。いずれの見解にもそれぞれ原典に依拠した「論拠」が十分あるのだから、スミスに内在したとき、どちらが正しいかどうかをそれだけで決定することはできないだろう。むしろ大切なことは、『国富論』における理論的分析においても、スミスはたんに「理論家」にとどまるわけではなく、「制度主義者」つまり「思考習慣」の累積的發展の事実に着目し、それを前提して理論を組み立て、展開しているという事

実に十分配慮して、スミスの理解を再構成することであろう。要するにスミスは、独立生産者モデルも資本主義モデルも、ともに『国富論』に織り込んでいたのであって、肝要なことは、制度主義あるいは生物学的社会認識の見地からとらえるスミスの場合には、モデル自体がいわば進化的論的累積構造をもつものとして理解されているため、歴史的に後の時代に登場する資本主義モデルのなかには、先立つ独立生産者モデルがその一部に組み込まれている、という特徴を持つことにならざるを得ないという事実を確認することである。純粹モデルを前提し、その枠内に収まる部分と収まらない部分とを析出しながら再構成と批判的評価を下すという学説史研究は、学説史研究というよりもむしろ、固有の理論研究に近く、純粹モデルとスミスの分析を比較することにより、純粹モデルそのものの妥当性・適合性を間接的に、つまり学説史的研究を通じて主張していることになる。このような方法がスミスの思想・彼の経済社会分析の「ある一部」をクリアーに切り出すことができるのは間違いないが、しかし、スミスの思想の全体像を理解するという目的からすれば、ますます「遠回り」することになるはずである。紙幅の制約もあって、本稿ではすべてを割愛せざるを得なかった我が国におけるスミス労働価値論に関する従来の研究については、渡辺恵一（2010）を参照願いたい。

- 12) S. ホランダーは、スミスにおける使用価値の議論が「生物学的な意味」や「文化的要素」を含んだものであると指摘してはいるが（Hollander 1973, 136）、全体としてどのように関連づけられているかという点の解明がなされておらず、あくまでも「行きがかり上の注目」ととどまっている。同じことは、実物における「物理的剰余と価値的剰余」という指摘についても妥当する。両者を識別したことに意味があることは確かだが、どのように関連付けたかを解き明かさなければ、スミスの主張の再構成としては甚だ不十分であると言わざるを得まい。
- 13) この間の事情については、スミスの A. ホルトアートの手紙（10/26, 1780）に詳しい。「初版第2巻の101頁で、私はたまたま、自然界はいなかる人為的な制度も変えることができない真実の価値を穀物に刻み込んでいると言ってしまいました。この表現は確かに強すぎるもので、つまり書くことに熱中していて思わず漏れたものでした。わたくしはたんにその貨幣価格を変えることによっては決して変えられぬ真実の価値を自然界は穀物に刻み込んでいる、というべきでした。そこでの議論に必要なことはまったくこれだけであって、したがって私が真に言いたかったことはそれにつきております。アンダーソン氏はこの性急な表現にうまく乗じて、私が著作の他の数カ所では、製造品の真実価格を引き下げるとはすべて粗生産物の価格を引き上げ、したがって結果的に穀物の価格を引き上げることを認めていたと意気揚々と論じております。第2版では私はこの不注意な表現を修正しましたが、こうすることでアンダーソン氏のすべての議論の根拠が除去されたと思っています。」（ed. E.C. Mossner & I.S. Ross, 1977, 251）
- 14) 維持しうる労働量つまり栄養価の点で「劣る点は価格の高さで補われる」関係が存在する——市場メカニズムが成立している——場合、農業剰余が増加するにつれて土地の生産物に対する需要が拡大し、様々な農産物が生産されるという事態が出現することが、明らかに富裕の歴史的進展の証拠になる。スミスは、穀物、食肉、ホップ、果物、家禽、葡萄酒、砂糖、タバコという順番で検討しているが（WN.I.xi.b.23-32）、おおよそ栄養価の高いものから低いものへという順番に並べられていることが示唆するように、自然価格が成立している自由な分業体系のもとでは、富裕の進展とともに、栄養価の低い生産物——贅沢品——の生産と消費が増加していくことになる。つまり、労働者が豊かになったときには、栄養価の低い贅沢品の占める割合が増え、貧しいときは、栄養価の高い穀物の占める比率が高まるということである。換言すれば、スミスの場合には、

R. マルサスと違って、食料＝穀物生産の増加は直接に人口増加をもたらすとは理解されず、需要の高度化に応じて贅沢な食料生産が増加すれば、人口増加率はそれに応じた分だけ低下するという事実が含意されている。

- 15) 「労働の真実の報酬、すなわち労働が労働者に代償としてもたらしうる (can procure) 生活の必需品と便宜品の真実の量は、今世紀をつうじて、おそらくその貨幣価格よりもさらに大きな割合で増加してきた。たんに穀類がいくらか安くなってきただけでなく、そのなかから労働に従事する貧しい人々の味覚にあい、栄養にも富むさまざまな食料をえるところの多くの他の作物が大幅に安くなってきた。たとえばジャガイモは、この王国の大部分のところで、現在では 30 ないし 40 年前の価格の半分にもみたくない価格である。同じことは、カブ、人参、キャベツについてもいえるのであって、このような作物は以前では鋤でしか栽培されていなかったのに、今では一般に鋤を使って栽培されている」(WN.I.viii.35) とスミスは指摘している。これがおおむね適正な指摘であることは、フォスターの 30 頁足らずのパンフレット (Foster 1664)、ミラーの園芸辞典 (Miller 1768)、イーデンの著作 (Eden [1797] 1966, 504-05) とデーヴィスの著作 ([1795] 1977, 35) がともに、ジャガイモの有利さはその低価格にあり、18 世紀になって主として貧困階級の食事に組み込まれ、広がっていったと強調している点から確認できる。シャークスによれば、ジャガイモ栽培が一気に広まるのは 1750 年以降であり (それまでは、豆類のほうが多量に消費された)、とくに 1714-15 年と 1728-9 年のひどい食料不足の結果であると言う。その栽培は、全国的にみると徐々にしか広まらなかったし、地域的にもまばらであったが、北部、特にランカシャーやカンバーランドで、すでに 1670-80 年代に快適なものとして受け入れられていたらしい。ゆでたり焼いたりする調理法が一般的だったようである (以上、Thirsk 2006, 179-81)。ジャガイモ栽培は他の野菜、カブ、ニンジン、キャベツやセロリ栽培などと同様、18 世紀になって「質的变化」つまりそれまでの穀類生産中心の農業からの歴史的な変化のプロセスの一環を体現するものであったとサースクは言うのである (Thirsk [1997] 2006, 60)。カロリー計算に基づいて食事の内容の変化を追跡したマルドリュウによれば、「18 世紀後半に、ジャガイモとカブは炭水化物の供給源としてシチューやポタージュとしてごくありふれた食事になった」(Muldrew 2011, 109) が、ジャガイモは野菜として裏庭の菜園で家族用に作付されることが多かったという。恐らくこれが、商品作物としてのジャガイモ栽培が食糧作物としてのジャガイモ栽培よりも大きく遅れた主要な理由であろう。

参 照 文 献

- Cannan, Edwin. Ed. [1904] 1922. *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations, with an Introduction, Notes, Marginal Summary and an Enlarged Index*. London: Methuen & Co. LTD.
- Darwin, Charles. [1871] 1874. *The Descent of Man, and Selection in Relation to Sex*. The 2nd edition, revised and augmented. 1874. London: John Murray. 『人間の進化と性淘汰』I, II 長谷川真理子訳 (1999 年) 文一総合出版。ただし邦訳の原典は、残念なことに、初版である。
- Davies, David. [1795] 1977. *The Case of Labourers in Husbandry: Stated and Considered with an Appendix*. Fairfield: Augustus M. Kelley.
- de Wall, Frans. 1996. *Good Natured: The Origins of Right and Wrong in Humans and Other Animals*. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press. 西田貞利・藤井留美訳『利己的なサル、他人を思いやるサル：モラルはなぜ生まれたのか』草思社、1998 年。

- 2009. *The Age of Empathy: Nature's Lessons for a Kinder Society*. New York: Harmony Books. 柴田裕之訳『共感の時代へ：動物行動学が教えてくれること』紀伊國屋書店，2010年。
- Douglas, Paul H. [1928] 1966. "Smith's Theory of Value and Distribution." In J.M. Clark, et al., *Adam Smith 1776-1926*. New York: Augustus M. Kelley.
- Eden, Frederic Morton. [1797] 1966. *The State of the Poor: or, An History of the Labouring Classes in England*. 3vols. London: Frank Cass & Co. Ltd.
- Fitzgibbons, Athol. 1995. *Adam Smith's System of Liberty, Wealth, and Virtue: The Moral and Political foundations of The Wealth of Nations*. Oxford: Clarendon Press.
- Foster, John. 1664. *Englands Happiness Increased, or, A Sure and Easie Remedy against all Succeeding Dear Years; By A Plantation of the Roots called Potatoes, whereof (with the Addition of Wheat Flower) excellent, good and wholesome Bread may be made, every Year, eight or nine Months together, for half the Charge as formerly*. London: Printed for A. Seile.
- Hollander, Samuel. 1973. *The Economics of Adam Smith*. London: Heinemann Educational Books.
- Miller, Philip. 1768. *The Gardeners Dictionary: containing the best and newest methods of cultivating and improving the kitchen, fruit, flower garden, and nursery*. The Eight Edition. London: John and Francis Rivington.
- Muldrew, Craig. 2011. *Food, Energy and the Creation of Industriousness: Work and Material Culture in Agrarian England, 1550-1780*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Pike, E. Royston. 1974. *Human Documents of Adam Smith's Time*. London: George Allen & Unwin LTD.
- Smith, Adam. [1759] 1976. *The Theory of Moral Sentiments*, 6th ed., 1790. Clarendon Press: Oxford.
- [1776] 1976. *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, Oxford: Clarendon Press.
- 1977. *The Correspondence of Adam Smith*. Edited by E.C. Mossner and I.S. Ross. Oxford: Clarendon Press.
- 1978. *Lectures on Jurisprudence*. Edited by R.L. Meek, D.D. Raphael and P.G. Stein. Oxford: Clarendon Press.
- Thirsk, Joan. 1978. *Economic Policy and Projects*. Oxford: Oxford University Press. 三好洋子訳『消費社会の誕生：近世イギリスの新企業』東京大学出版会，1984年。
- [1997] 2006. *Alternative Agriculture: A History*. Oxford: Oxford University Press.
- 2006. *Food in Early Modern England: Phases, Fads, Fashions 1500-1760*. London: Hambledon Continuum.
- Young, Arthur. [1771] 1967. *A Six Months Tour though the North of England*, 4vols. New York: Augustus M. Kelley.
- 高 哲男 (1994) 「アダム・スミス『法学講義 A ノート』における自然価格と市場価格」、『広島大学経済論叢』17-3・4, 111-143.
- (1995) 「アダム・スミス『国富論』第1・2編の理論的・実証的研究」平成6年度科学研究費補助金 一般研究 (C) 研究成果実績報告書。
- (2007) 「アダム・スミスにおける本能の概念化と経済学の生物学的基礎」『商経論叢』43-1, 113-153.
- 渡辺恵一 (2010) 「スミス労働価値論の再読——商品価値の認識と実在」『大阪経大論集』61-1, 47-62.